

尾道市の歴史と遺跡 古墳時代

おからで
蜈蚣石（三ノ口御調田）

高尾4号古墳（御調田）復元

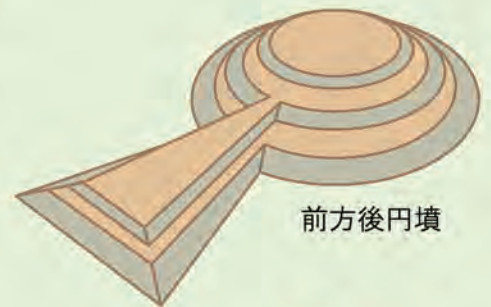
三ノ口御調田
古墳群

①古墳時代とは

日本の歴史の中には、古墳と呼ばれる巨大な墓を作ることによって権力の大きさを表した時代があります。古墳は、階層差を最も象徴するものとして日本列島のほぼ全域に展開し、3世紀後半から7世紀後半の約400年も造り続けられました。この古墳によって特徴付けられる時代を「古墳時代」と言います。400年という長い期間の中では、新しい文化の導入やそれまでの文化の衰退などを理由に、ものの考え方や生活スタイルなどが刻々と変わっていきました。文化の移り変わりを確認していくと、古墳時代は大きく前期(4世紀代)、中期(5世紀代)、後期(6世紀代)、終末期(7世紀代)と4つの時期に分けられます。

前期

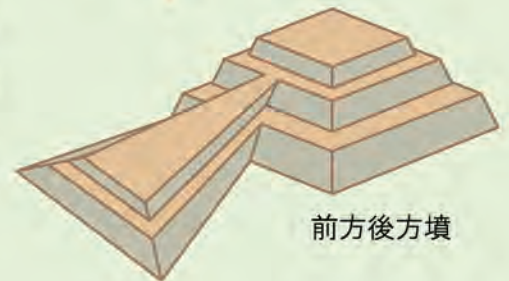
前期(4世紀代)は、奈良盆地(奈良県)を中心に前方後円墳が造られ始め、やがて全国各地へと広まっていきました。古墳の内部には竪穴式石室が設けられ、死者はここに安置されました。死者の周りには主に鏡や玉などマツリに関する副葬品が納められています。



前方後円墳

中期

中期(5世紀代)は、河内平野(大阪府)を中心として関東や九州にも巨大な前方後円墳が出現します。前期に比べて規模は巨大化しますが、その数は減少していきます。竪穴式石室の中には、武器や武具などの軍事に関する副葬品が目立ちます。



前方後方墳

後期

後期(6世紀代)は、畿内地方以外ではほとんど前方後円墳が造られなくなり、円墳が多くなります。また、各地では群集墳が形成され始めます。古墳の内部にはそれまでの竪穴式石室に変わり、大陸から伝わった横穴式石室が造られるようになります。副葬品は、須恵器や馬具、農具などの実用的なものが見られます。



円墳

終末期

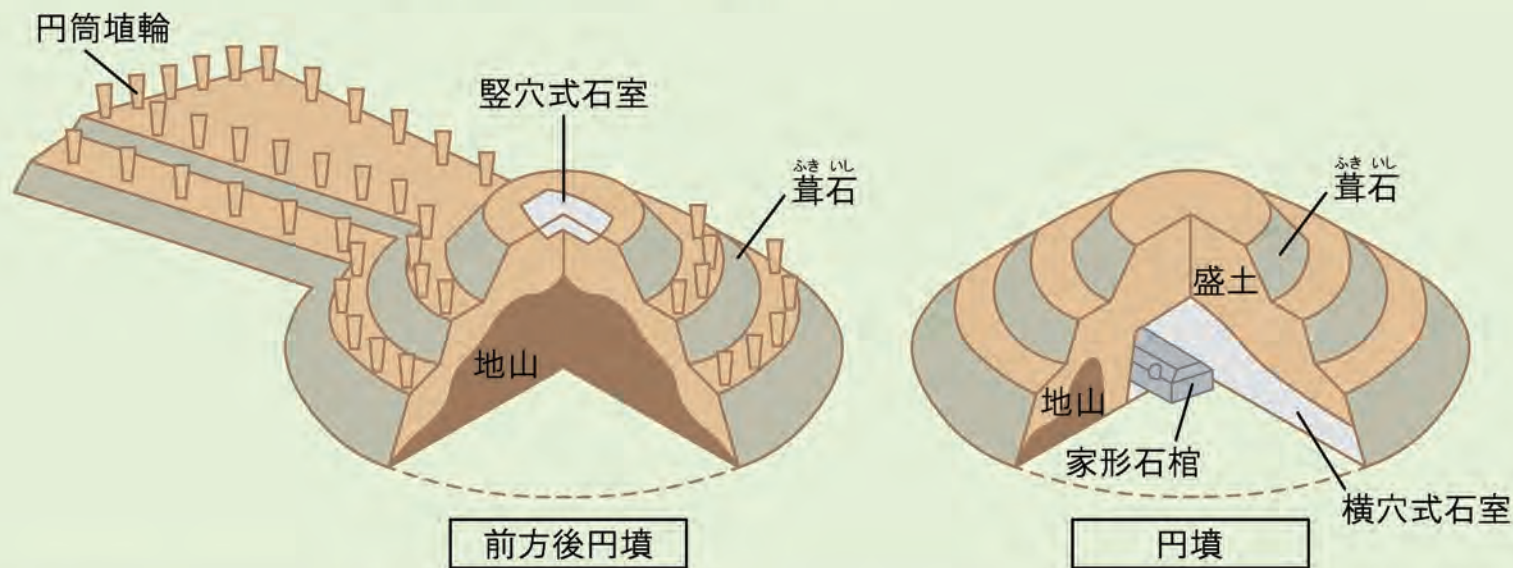
終末期(7世紀代)は、飛鳥時代と重なる時期ですが、いぜんとして一部の人間に対して古墳を造るという風習が残っており、古墳時代の終末期という区分としています。横穴式石室は、技術の進歩によって巨石を組み合わせたものとなり、横口式石槨のように切石加工で美しく整ったものも造られるようになりました。



方墳

②古墳の形状と内部構造

古墳は、様々な施設が組み合って造られています。



墳丘と周壕

「墳丘」は、「土を高く盛り上げて造った墓や丘」という意味があります。墳丘の形状には、前方後円墳のほか、前方後方墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳、双方中円墳、八角墳などがあります。階層差によって形状が区別されていたようです。尾道では、前方後円墳と円墳が確認されています。

「周壕」は、墳丘の周りに見られる堀や溝を指します。外界と聖域である古墳の境界を表現するものと考えられていますが、もともと墳丘に盛るための土を採取したくぼみであると思われます。

葺石と埴輪

「葺石」は、墳丘の土が流れ出さないように補強すると同時に、地肌を美しく整ったものに見せるため、墳丘の斜面に貼り付けられた石です。

「埴輪」は、古墳の「マツリ」に関係するもので、墳丘の平坦面に並べられました。円形の筒形をした円筒埴輪、人物・動物・家・武器や武具などの形象埴輪があります。これらは、古墳時代に使用された土器である土師器と同じ素焼きの焼物です。埴輪が並べられた意味については様々な説が考えられており、外界からの邪気を防ぐためであるとか、当時の葬儀を模したものなどとも言われています。

埋葬施設

墳丘の内部には、死者を安置するための埋葬施設が造られます。古墳に葬られる人物は木棺や石棺といった棺に入れられ、室や槨などの施設に安置されることとなります。

「室」は、棺を納めるために一定の空間が確保された空間、「槨」は棺をほぼ密封する構造となっています。

室や槨には、縦穴系と横穴系が存在しますが、古墳時代前期では主に縦穴系の施設が作られ、後期には大陸から伝わった横穴系の施設へと移り変わります。

棺

「棺」は、遺体を入れるもので、古墳時代では木や石あるいは焼物で作られていました。製作の方法は、その材料を“削り抜く”と“組み合わせる”の二通りがあります。形状も様々で、竹を割ったような割竹形や船形、長持形、家形のものなどが存在します。また、棺に使われた材料の種類にもこだわりが見られます。

割竹形木棺には水に強く腐食しにくいコウヤマキが、石棺には軟らかくて加工のしやすい凝灰岩が選ばれています。質の良い凝灰岩は、兵庫県高砂産の「竜山石」、熊本県宇土産の「馬門石」、大阪府・奈良県境の「二上山白石」などがあります。

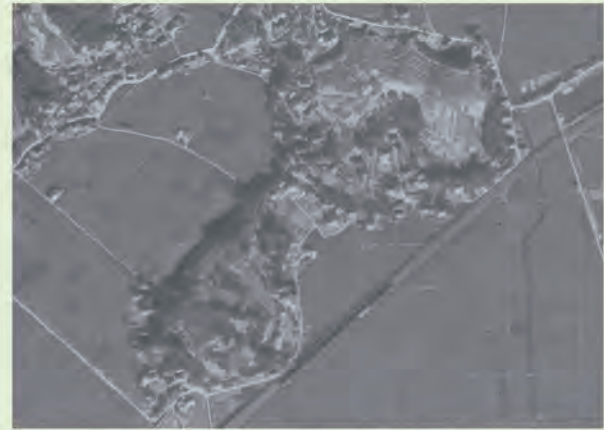
③尾道の王墓 - 古墳時代前期／中期 -

尾道には古墳時代前期に相当する古墳として黒崎山古墳があります。浦崎町^{みちごえ}の満越遺跡では土器による塩作りが盛んに行われていたため、「監督する人物が存在し、その古墳があるのではないか？」と考えられますが、今のところ関係性は不明です。

古墳時代中期になると、尾道市の松永湾沿岸地域にて、大元山古墳、玉比売塚古墳^{たまひめづか}などが造られ、尾道市内における“古墳のある風景”が始まりました。

大元山古墳と黒崎山古墳（高須町）

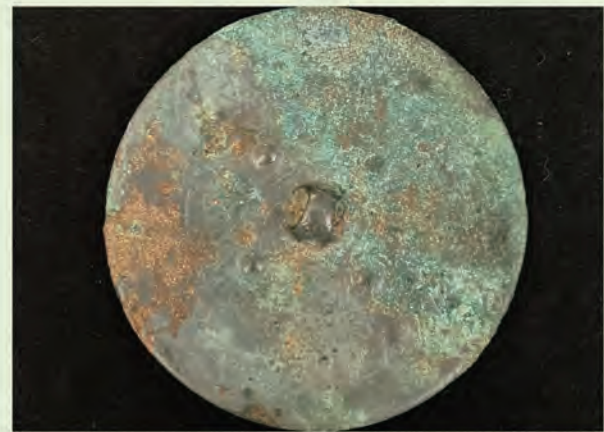
松永湾を望む高台の上に並んで造られました。これらの被葬者は、湾周辺の海上交通と塩作りを支配していたのではないかと考えられます。大元山古墳は全長約50m、黒崎山古墳は全長約70mと、備後南部最大級の墳丘規模はその権力の大きさを物語っています。



大元山古墳・黒崎山古墳(昭和22年頃)

玉比売塚古墳（西藤町）^{たまひめづか}

松永バイパス北側の丘陵にある箱式石棺の円墳です。内部からは、女性の人骨と勾玉や管玉、尾道市では珍しい小型の日本製銅鏡（直径6.4cm）が出土しました。これは、中国の鏡を模倣して作られたものです。古墳の築造時期は、古墳時代中期と考えられます。



玉比売塚古墳から出土した銅鏡

後口山古墳（御調町）^{ごくちやま}

御調川の流れる御調町内に後口山古墳があります。この古墳は、町の中心部の小高い山の上に造られた箱式石棺の円墳です。内部からは男性の人骨と、管玉やガラス玉が出土しました。副葬品が少ないのは、古墳時代中期の特徴と言えます。

細島第1号古墳（因島重井町）

因島の北に浮かぶ細島にも古墳が存在しています。この古墳は、細島南東端の丘陵に造られた箱式石棺の円墳です。古墳時代中期の時期に造られたものと考えられ、細島周辺の海上交通を支配していた人物の墓と推定されます。



細島第1号古墳

④新たな石室文化 - 古墳時代後期 -

古墳時代後期に入ると、尾道市内に多くの古墳が造られるようになります。当時の政権状況などの変化から、墓づくりや埋葬に対する考え方も変わり、竪穴式石室から横穴式石室を持つ古墳が多く見られるようになります。

おおぞう た やま

大想田山古墳群（美ノ郷町）

大想田山古墳群は藤井川上流域、流通団地がある丘陵上にあり、2基の円墳から構成されています。いずれも尾道市内では珍しい埋葬施設で作られています。

第1号古墳が第2号古墳より若干古く、埋葬施設は「折衷様式の石室」で、竪穴式石室の構造と横穴式石室の石材の使い方を併せ持ちます。この様式は世羅町や東広島市などで確認されており、何らかの関係をうかがうことができます。

第2号古墳の埋葬施設は、「導入期の横穴式石室」と呼ばれるもので、尾道市内では最も古い横穴式石室の形態です。最盛期の横穴式石室は、玄室(棺を入れる空間)と羨道(玄室への道)の幅がほぼ同じ規模となりますが、「導入期の横穴式石室」の羨道は細く短い形態をしています。

広島県内の多くの地域では、6世紀前半に横穴式石室が導入されたようですが、尾道市周辺ではやや遅く、6世紀後半に導入されたようです。

当古墳群は、第1号古墳の竪穴系の石室から第2号古墳の横穴系への移り変わりを示しています。



石室内の状況

むか で

蜈蚣岩山口第1号古墳（御調町）

蜈蚣岩山口第1号古墳は貝ヶ原地区にある、巨石を用いて造られた横穴式石室を埋葬施設とする古墳です。

石室の規模は、石室長4.3m以上、奥壁幅2.4m、高さ2.3mと尾道市内では最大、広島県内でも最大クラスです。

古墳の造られた時期は、出土した須恵器により7世紀前半と考えられます。同じ時期に存在していた高尾古墳群、貝ヶ原古墳群との関係については、明らかになっていません。



蜈蚣岩山口第1号古墳

栗原川・藤井川周辺の古墳

しょうじ が さこ

小路ヶ迫古墳（桜町小路ヶ迫）

栗原川西側の竜王山麓にあり、地域の住民から祠として祀られていましたが、発掘調査により大型の横穴式石室の円墳であることが分かりました。石室の規模は、石室長3.9m以上、奥壁幅1.7m、高さ1.7mで、尾道市内最大級です。内部からは須恵器や鉄刀、勾玉などが出土しました。

古墳の造られた時期は7世紀前半頃と考えられますが、9世紀後半頃の須恵器や土師器も出土しており、後の時代に古墳が再利用されていたと推測されます。古墳築造当時は、この周辺まで海が近くあったため、海辺で営む集団の首長が葬られていたと考えられます。



小路ヶ迫古墳

いのこ さこ

猪子迫第1号古墳（美ノ郷町猪子迫）

藤井川中流域を望む丘陵上にあり、一部破壊されていますが、大型の横穴式石室が残っています。石室長9.2m、奥壁幅1.9m、高さ1.9mで、小路ヶ迫古墳よりもやや大きく作られ、尾道市内最大級です。石室の規模や、石材の積み方などが小路ヶ迫古墳と似ているため、7世紀前半頃に造られた古墳と考えられます。大きな石を用いた石室を造るには高度な土木技術が必要であり、当時の技術の発達が見られます。



猪子迫第1号古墳

御調川周辺の古墳

高尾第4号古墳（御調町）

御調町中心部と御調川流域を広く見渡せる丘陵の上に造られた9基を、高尾古墳群と呼びます。

その内の高尾第4号古墳は、横穴式石室の円墳で、石室長6.1m、奥壁幅1.3m、高さ1.5mとなっています。石室から出土した須恵器の中で、最も古いものは6世紀末のものであり、古墳もその時期に造られたものであると考えられます。また、7世紀前半や8世紀前半頃の須恵器もあり、追葬などが行われた可能性があります。御調町の中心地域を支配していた首長が埋葬されていたと考えられます。



高尾第4号古墳(復元)

⑤集落遺跡（塩づくり） 古墳時代前期～飛鳥時代

古墳以外にも、当時の人々の暮らしについて知る手がかりとなる“集落遺跡”が尾道市内にはあります。海に近い地域では塩づくりが盛んに行われていました。塩は料理以外にも、保存や祭祀など生活に欠かせないものです。当時は、“製塩土器”を使って塩を作られていました。

みちごえ

満越遺跡（浦崎町満越）

浦崎町満越地区の南側海岸沿いにあり、古墳時代前期から飛鳥時代までの長い期間、塩を生産していた痕跡の残る遺跡です。発掘調査の結果、製塩土器や塩を作るための炉跡、高坏など祭祀用の土器と、何らかの祭祀を行ったと考えられる祭祀土坑が確認されました。

また、畿内・吉備・山陰地域の特徴をもつ土器も出土しています。当時これらの地域は日本列島でも一大勢力であり、満越遺跡および尾道周辺がその勢力下にあった可能性が高いと考えられます。当時の社会情勢を解明するうえで、きわめて重要な遺跡といえます。



満越遺跡から出土した製塩土器



おおはまひろはた

大浜広畠遺跡（因島大浜町）

因島北東部の緩斜面地にあり、縄文時代晩期～古墳時代前期の遺跡です。発掘調査により、縄文土器や土師器、石器などが出土しました。遺跡南端では製塩土器が集中して発掘されました。



大浜広畠遺跡 遠景

製塩土器

満越遺跡からは多量の製塩土器が出土していますが、全て同じ形をしているわけではありません。土器の形や厚さなどの特徴から、全部で4つのタイプに分けることができます。出土した層の上下関係（基本的に上の層が新しく、下の層が古いという考え方）や備讃瀬戸周辺に分布する製塩遺跡の調査例を踏まえると以下の様に土器の形が変化し、時期もそれぞれ異なるものと分かりました。



きやくだい
脚台タイプ

古墳時代前期



む きやく
無脚コップタイプ

古墳時代中期中葉～後期



大型ボウルタイプ

古墳時代後期～飛鳥時代



うす で せん てい
薄手尖底タイプ

飛鳥時代～奈良時代

⑥古墳時代遺跡マップ



【赤色立体地図】

地形の凹凸や傾斜量を「赤色の彩度と明度」で表します。立体的に地形状況が把握できるため、火山地形の研究、遺跡や古墳調査、登山地図など幅広く活用されています。

国土地理院のホームページから閲覧ができます。

※中国管内航空レーザー測量業務平25中第92号及び広島県航空レーザー測量結果を使用

問合せ先 〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目15番1号
尾道市企画財政部文化振興課／Tel.0848-20-7425